

鹿 7 山の不思議 = = = 猪・鹿・狸より

山の神の手心から、獲物を匿されることは、前の猪の話にも言うた。それとはちがって、現在捕ってそこにおいてある獲物が、ちょっとの間、水を呑みに谷へ下がったりした隙に、影もなくなることがあった。四辺に人影もない深山の中であってみれば、不思議と言うよりほかはなかった。狩人はそうした時の用意に、獲物の傍らを離れる時は鉄砲と山刀を上十字に組んで置いた。あるいは半纏（はんてん）などを掛けて置くこともあった。鳳来寺山中などで、時折そうした目に遇った。山犬のしわざとも言うたが、あるいは山男のなす業とも信じられた。



鳳来寺山_屏風岩と鐘楼

鳳来寺山は、全山九十九谷と言ひ伝えて、地続きの牧原御料林を合せて、ほとんど四里四方に亘る一大密林であつた。山中の地獄谷と称する所などは、密林中に高く滝が落ちかかつて、風景絶景であると言つたが、一たび奥へ入り込めば、出ることは叶わぬとさえ言つた。そのため一部の狩人のほか消息を知るものもなかつた。たまたま鰻釣にはいったものの談では、思

いのほか溪谷の様が綺麗で、かつて釣を試みたものもあるらしいと語つた。ずいぶん久しい前の話らしいが、八名郡能登瀬村某の〔の生田〕家では、牧原御料林から、不思議な裸体の青年を二人捕らえて来て、農を手伝わせたと言ふ。力が強くて主人の言付けをよく守つたが、言葉がさらに通じなくて困つたと言ふ。あるいは山男でないかとも言うたが、それ以上詳しいことは聞かなかつた。

鳳来寺山から東に當つて、三輪川を隔てた八名郡大野町の奥の、山吉田村阿寺（あてら）〔現、南設楽郡鳳来町〕はひどい山間の部落であるが、部落内に七滝と言ふ滝があつた。その水源である柘の窪からハダナシの山へかけての山中は、昔から狩人が獲物を奪られると言ひ伝えた場所だつた。現に経験したものはもう聞かなんだが、その山に住むヒメシメ女郎（姫女郎）の仕業と言つた。しかも一方には、山の主が美しい片脚の上臈という伝説もあつた。附近へ入り込むものが、紙緒の草履を穿いていると、かならず片方を奪られたと言ふのである。

山中で紙緒草履を穿くものもなかつたと思われるが、実は別の話が絡んでい

たのである。狩りとは何の関係ももたぬ余計なことだったが、話のついでにヒメン女郎の伝説の結末をつけておく。

前言うた七滝の上に、子抱き石の出る個所があった。子抱き石とは、石の中にさらに別の小石を孕んだものである。子種のない婦人が、そこへ行って、一つを拾って懐にして帰れば、懐妊すると言いう言い伝えがあった。女連れなどで出かける者も少なくなかった。その折り、紙草履を穿いていれば、かならずヒメン女郎に奪られたと言うたのである。現に草履を奪られて、いつか裸足になっていたという女もあった。